

「言語運用力」試験の作題ガイドラインについての 問題例を通じた考察

荒井 清佳, 椎名 久美子, 伊藤 圭, 桜井 裕仁, 宮埜 寿夫 (大学入試センター)

大学入試センター研究開発部では、大学で学ぶための基本的な能力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観点から評価することを目的とした試験(「言語運用力」試験及び「数理分析力」試験)とこの試験の枠組みに沿った問題を各大学が個別に作成できるようにするための手引書の開発を進めてきた(大学入試センター研究開発部, 2019)。本稿では、作題ガイドライン(Ver. 2)について、その「能力の問い方」及び「素材」に焦点を当て、問題例を示すことで、作題時に注意した方が良いと考えられる事項を明らかにする。さらに、「能力の問い方」と「素材」の関係についても考察を加える。

キーワード：言語運用力, 作題ガイドライン, 能力の問い方, 素材

1 はじめに

1.1 研究の背景

大学入試センター研究開発部では、AO 入試や推薦入試などを経て大学や短期大学に入学することを志願する幅広い学力層の受験者を想定して、大学で学ぶための基本的な能力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観点から評価することを目的とした試験の開発に関する研究を平成 23 年度から行ってきた(大学入試センター研究開発部, 2014, 2016)。この試験は、志願者の基本的な能力を「言語運用力」と「数理分析力」の分野から測ろうとするものである。

試験の開発とともに、大学入試センター研究開発部では、その枠組みに沿った問題を各大学が個別に作成できるようにするための手引書の開発を進め、問題の試作や試作問題を用いたモニター調査の実施を経て、この試験の枠組みに沿った問題を大学が個別に作成できるようにするための手引書として『「新しい試験」の枠組みおよびガイドライン』(以下、「作題ガイドライン(Ver. 1)』)を公表した(大学入試センター研究開発部, 2016: 356-376; 荒井ほか, 2018)。作題ガイドライン(Ver. 1)が問題作成のための手引書として機能するかどうかを検討するために、大学教員に作題ガイドライン(Ver. 1)に基づく問題の試作を依頼した。試作に協力した大学教員からの指摘に基づいて作題ガイドライン(Ver. 1)を改訂し、『「言語運用力・数理分析力」試験の枠組みおよび作題ガイドライン(Ver. 2)』(以下、「作題ガイドライン(Ver. 2)』)を作成した(大学入試センター研究開発部, 2019)。

作題ガイドライン(Ver. 2)は、「言語運用力」と「数理分析力」の両試験を対象としているが、本稿では「言語運用力」試験を扱う。

表 1 作題ガイドライン(Ver. 2)の 3.1 節の構成

3.1.1 問題作成の基本方針
3.1.2 能力の問い方
(1) L1: 情報の把握
(2) L2: 内容の理解
(3) L3: 推論と推察
3.1.3 問題の構成要素
(1) 素材
(2) 問いかけ文
(3) 選択枝
3.1.4 問題の構成要素の組合せ方
(1) 構成要素を組合せる際の条件
(2) 構成要素の組合せ方の基本形
(3) 基本形の応用
3.1.5 問題冊子の構成について
3.1.6 例題集

1.2 「言語運用力」試験とその作題ガイドラインの改訂

「言語運用力」試験とは、様々な情報源から新しい知識を吸収したり、集めた情報をもとに論理的に考えたりするなどの、大学での学びの場面で必要とされる能力を測ろうとする試験である。大学で学ぶ際の情報源としては書籍や大学の講義など様々なものが考えられるが、「言語運用力」試験では、情報源として文章や発話を問題の中で示し、その内容の読み取りや理解・解釈等を行う能力を測定する。

作題ガイドライン(Ver. 2)において、「言語運用力」試験の問題作成の手引きに相当する節は 3.1 節である。表 1 に作題ガイドライン(Ver. 2)の 3.1 節の構成を示す。

作題ガイドラインの改訂過程において、「言語運用力」の作題ガイドライン (Ver. 1) の問題点として指摘が多かったのは、測ろうとする能力の分類ラベルや、素材 (解答に必要な情報を含むテキスト等のこと) に関するものであった。これらの指摘に対応するため、作題ガイドライン (Ver. 2) では、測ろうとする能力の問い方に関する節 (3.1.2 節「能力の問い方」) の追加や、素材に関する説明 (3.1.3 節 (1)「素材」) の加筆を行った (椎名ほか, 2019)。

- テキスト：解答に必要な情報を含む文章や発話を指す。受検者が読んで理解することで「問いかけ文」に対する解答を得られるものでなくてはならない。
- 資料：テキストを理解する助けとなる図表、グラフ、写真等を指す。資料は必須ではない。
- 素材：解答に必要な情報を含むテキストと、テキストに付随する情報を示す資料を指す総称。

1.3 目的及び本稿の構成

本稿では、作題ガイドラインの主要な改訂点である「能力の問い方」(3.1.2 節) 及び「素材」(3.1.3 節 (1)) に焦点を当てる。作題ガイドライン (Ver. 2) で述べられている「能力の問い方」及び「素材」について、問題例を示すことで、作題時に注意した方が良いと考えられる事項を明らかにする。さらに、「能力の問い方」と「素材」の関係についても考察を加える。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、「言語運用力」試験で測ろうとする能力を示し、3 節では本稿で扱う問題例を示す。この問題例を用いて、4 節では「能力の問い方」について、5 節では「素材」について、それぞれ作題時に注意した方が良いと考えられる事項を明らかにする。6 節で考察とまとめを行う。

2 「言語運用力」試験で測ろうとする能力と用語の定義

作題ガイドライン (Ver. 2) では、「言語運用力」試験で測ろうとする能力を3つに分類し、L1～L3 のラベルを付けている (大学入試センター研究開発部, 2019:130)。その分類を表 2 に示す。

表 2 測ろうとする能力の分類

L1：情報の把握	テキスト内の情報を正しく読み取る能力
L2：内容の理解	テキストの内容の理解や解釈を行う能力
L3：推論と推察	内容の理解にとどまらず、推測、評価、判断等を行う能力

「言語運用力」試験において文章や発話は重要な役割を果たしている。作題ガイドライン (Ver. 2) ではこれらを指す用語として「テキスト」「資料」「素材」を次のように定義している。

3 本稿で扱う問題例について

作題ガイドライン (Ver. 2) の 3.1.6 節「例題集」には、L1～L3 の分類や問題形式を説明するための例題が収録されている。これらの問題は作題ガイドライン (Ver. 1) の開発過程で大学入試センター内の研究者が試作した問題であり、L1～L3 の枠組みに合致していることが確認されたものである。

本稿では、作題ガイドライン (Ver. 2) の 3.1.6 節「例題集」に掲載されている例題の中から例 2 と例 3 を取り上げ、L1～L3 の能力の問い方や素材の違いについて考察を行う。

3.1 例 2 について

例 2 を図 1 に示す。例 2 は、Aさんと店員の間で交わされた会話と与えられた地図を手がかりにして、施設の位置を把握する問題である。問 1～問 3 の 3 つの設問があり、それぞれ L1, L1, L2 の能力を問う。各設問に共通する「素材」として、対話と地図が提示されている。

3.2 例 3 について

例 3 を図 2 に示す。例 3 は、地球の内部構造に関する文章を読み、その内容を把握する問題である。問 1～問 3 の 3 つの設問があり、それぞれ L1, L1, L3 の能力を問う。各設問に共通する「素材」として、地球の内部構造に関する文章が提示され、さらに問 3 では「素材」として新たに文章が追加されている。

4 「能力の問い方」と問題例との関連

4.1 作題ガイドラインにおける「能力の問い方」

能力のラベル L1～L3 に関して、作題ガイドライン (Ver. 1) に基づく問題の試作に協力した大学教員からは、L1～L3 の区別が分かりにくいという指摘があった。そのため、作題ガイドライン (Ver. 2) では「能力の問い方 (3.1.2 節)」という節を設け、それぞれの

第 1 問 鉄道の駅を降りた A さんは、駅前の売店で買い物をしたついでに、店員と次のような会話を交わした。「A」は A さんの発言、「店」は店員の発言であることを示す。会話文と地図を手がかりにして、下の問い（問 1～3）に答えよ。（配点 15）

A 「これから銀行に寄って用事を済ませてから市役所に行くつもりだけど、この町は初めてなので、迷わずに行けるか心配だよ」

店 「この付近の道路は碁盤目状になっているので、初めての方にもわかりやすいと思いますよ。この地図を見てください。東西方向に伸びた道路は、駅に近いほうから順に 1 番街、2 番街と名前が付いていますね」

A 「銀行はどこにあるのかな」

店 「公園の西側を南北に走っているのが松並通りで、東側を走っているのが竹沢通りなのですが、銀行は竹沢通りと 5 番街の交差点の南西の角にありますよ」

A 「ここからけっこう遠いね」

店 「ここからだとも市役所のほうが近いですよ。駅の正面を南北に走る桃山通りの 1 本西側を走る梅川通りと 3 番街の交差点の南西の角ですから」

A 「でも、銀行でどうしても先に済ませたい用事があるんだ」

店 「そうでしたね。あ、そうだ。現在、公園は剪定作業期間なので中を通れません。それから、公園の北東の角の交差点は、工事中で歩行者も通行止めです」

A 「だったら、桃山通りをしばらくまっすぐ行って左に曲がるのが一番簡単かな」

店 「郵便局を目印にするといいですよ。ここから進んで郵便局を過ぎてすぐの交差点を渡って左に曲がれば着きますよ」

A 「なるほど」

店 「銀行の後で市役所に行くなら、途中にある喫茶店の割引券を差し上げますから、良かったらどうぞ。銀行から市役所に向かう最初の交差点の南東の角です」

A 「それはうれしいね。行ってみよう。ありがとう」

<地図>

問 1 市役所がある区画として正しいものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

 ① ア ② イ ③ ウ ④ エ ⑤ オ ⑥ カ

問 2 同じ区画にあるものの組合せとして正しいものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

 ① 市役所と銀行 ② 市役所と郵便局 ③ 市役所と喫茶店
 ④ 郵便局と喫茶店 ⑤ 郵便局と銀行 ⑥ 喫茶店と銀行

問 3 郵便局に最も近いものとして正しいものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

 ① 市役所 ② 喫茶店 ③ 売店 ④ 銀行

図 1 例 2 (【測ろうとする能力】 L1, L2 ; 【素材の種類】 対話 (地図を含む))

第 1 問 地球の内部構造に関する次の文章を読み、下の問い（問 1～3）に答えよ。（配点 24）

地球は、半径約 6400km の球体であるが、自転による遠心力のため、赤道方向にわずかに膨らんだ回転円体となっている。地球の内部は直接調べることはできないが、地震波の伝わり方や、地磁気の観測などによって、次のようなことが分かっていた。

地球の表面は、厚さ数 km (海底) から数十 km (大陸) の地殻と呼ばれる岩石でできた殻 (から) で覆われている。この地殻はひとつながりではなく、十数枚の「プレート」と呼ばれる「かけら」に分かれていて、1 年間に 1～10cm 程度の速さで、相対運動している。プレートとプレートの境目では、一方が他方の下に潜り込んだり、両方のプレートが横に成長しながら互いに遠ざかったり、すれ違ったりしている。このようなプレートの運動は、その下にあるマンテルの対流に引きずられているためと考えられており、この仕組みをプレートテクトニクスという。

マンテルは、地殻の下面 (モホロビッチ不連続面) から、地表からの深さ (深度) 2900km のゲーテンベルク不連続面までを占めており、かんらん岩などの岩石でできているが、性質や成分の異なるいくつかの固体の層から成っている。深度 100～120km までのその最上部は硬い岩石であり、地殻と一体化してプレートを形成し、リソスフェアと呼ばれる。対流しているのはその下の深度約 410km までを占めるアセノスフェアと呼ばれる部分であり、高温・高圧のやわらかな固体であり、ゆっくりと流動することができる。

マンテルの下は核と呼ばれ、鉄やニッケルなどの金属でできており、深度 5100km までは外核と呼ばれ、液体であり、それより下は内核と呼ばれ、固体である。

問 1 地球内部の構造について述べた文として、本文に述べられた内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。
 ・
 ① 地殻、マンテルは岩石でできており、外核、内核は金属でできている。
 ② 地殻、外核は岩石でできており、マンテル、内核は金属でできている。
 ③ 地殻、内核、外核は岩石でできており、マンテルは金属でできている。
 ④ リソスフェア、アセノスフェア、内核は固体であり、外核は液体である。
 ⑤ リソスフェア、内核は固体であり、アセノスフェア、外核は液体である。
 ⑥ リソスフェア、アセノスフェアは固体であり、外核、内核は液体である。

問 2 地球の表面をおおっているプレートの厚さとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

 ① 数 km～数十 km ② 100～120km ③ 約 410km
 ④ 2900km ⑤ 5100km

問 3 地中を伝わる地震波には、振動の向きと伝わる速度が異なる S 波と P 波という 2 種類の波があり、これまでの観測から、震源地から見て地球の反対側のある範囲には、P 波は伝わるが、S 波が伝わらない「影」の領域があることが知られている。この現象が起きる理由を説明するために、本文に書かれていることからのほかに必要となる知識を記述した文として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

 ① P 波は固体中も液体中も伝わり、S 波は固体中では伝わるが液体中では伝わらない。
 ② P 波は金属中も岩石中も伝わり、S 波は金属中では伝わるが岩石中では伝わらない。
 ③ P 波の速度は S 波の速度より大きい。
 ④ P 波の速度は S 波の速度より小さい。
 ⑤ 地震波の速度はモホロビッチ不連続面より下では上より大きい。
 ⑥ 地震波の速度はモホロビッチ不連続面より下では上より小さい。

図 2 例 3 (【測ろうとする能力】 L1, L3 ; 【素材の種類】 解説)

能力の問い方の例を具体的に挙げることによって能力のラベルについての考え方が伝わりやすくなるようにした(椎名ほか, 2019)。

作題ガイドライン (Ver. 2) の 3.1.2 節「能力の問い方」では次のように能力の分類ラベル L1 ~ L3 ごとに問い方の例を挙げている。

(1) L1: 情報の把握

- ・テキストで述べられた事実と合致する／しないものを選択枝から選ぶ(詳細まで正確に把握する)。
- ・テキストで述べられた事実と合致する／しないものを選択枝から選ぶ(テキスト全体を把握する)。

(2) L2: 内容の理解

- ・テキストで述べられた手順やルールをある状況に適用した結果を選択枝から選ぶ。
- ・テキスト全体の論旨と合致する／しないものを選択枝から選ぶ。
- ・テキストの説明に対応する具体例を選択枝から選ぶ。

(3) L3: 推論と推察

- ・テキストから読み取った内容に基づき、推測できること／できないことを選択枝から選ぶ。
- ・テキストの主張を補強するのに役立つ事項を選択枝から選ぶ。

なお, L1 では, 問い方の例に続いて「テキストを読まなくても一般常識や知識でそれぞれの選択枝の正誤が判断できるものは避ける。例えば, すべての選択枝を内容的に正しいものにして, テキストを読まないで正誤の判断がつかないようにするなどの工夫が考えられる。」という注意事項が挙げられている。この注意事項は L1 だけでなく, L2 や L3 にも当てはまるものである。

4.2 L1, L2 の問い方と例 2

例 2 の問 1 と問 2 は L1 (情報の把握) を, 問 3 は L2 (内容の理解) を測ろうとする設問である。

問 1 の問いかけ文は「市役所がある区画として正しいものを選び」, 問 2 の問いかけ文は「同じ区画にあるものの組合せとして正しいものを選び」である。問 1 は, 店員が市役所について話している 1 文について正確に把握すれば, 市役所の位置を把握でき, 正答を得られる。問 2 は, A さんと店員の対話の全

体を読み, 郵便局や銀行等のその他の施設の位置も把握する必要がある。問 1 では対話の 1 カ所だけ, 問 2 では対話の全体と, テキストを読む範囲の違いはあるものの, どちらも対話から道路の名称と方角に関する情報を読み取って地図を対応させれば正答を導くことができる設問である。両設問とも, 情報を正確に読み取る, すなわち, テキストで述べられた事実と合致するものを選ぶ設問であり, L1 (情報の把握) を測る設問と言える。

問 3 は, 各施設の位置を把握したうえで, 施設間の距離について考える設問である。与えられた素材(対話と地図)からは, 郵便局の位置は複数通り考えられる。また, 問いかけ文の「最も近い」という表現が, 直線距離と経路距離のどちらの意味で使われているのか明示されていない。しかし, 直線距離と経路距離の両方の場合を考えて試してみることで, 正答を導くことが求められている。どちらで考えても郵便局に最も近い施設は 1 つに決まる。問 3 の問いかけ文は「郵便局に最も近いものとして正しいものを選び」であり, 問いかけ文だけを見ると L1 (情報の把握) を測る設問にも見えるが, 問 1, 問 2 のように単独の施設の位置を把握するのではなく, テキストから複数通り考えられる施設の位置関係を理解する必要があるため, L2 (内容の理解) を測る設問に分類される。

なお, 地図は架空のものなので, 特定の駅や市の地理に関する知識からは選択枝の正誤は判断できず, テキストを読む必要のある設問になっている。

4.3 L1, L3 の問い方と例 3

例 3 の問 1 と問 2 は L1 (情報の把握) を, 問 3 は L3 (推論と推察) を測ろうとする設問である。

問 1 の問いかけ文は「地球の内部構造について述べた文として, 本文に述べられた内容に合致するものを 2 つ選び」, 問 2 の問いかけ文は「地球の表面をおおっているプレートの厚さとして最も適当なものを選び」である。例 3 で与えられたテキストには, 地殻やマントルなどが何からできているか(岩石か金属か), リソスフェアや外核, 内核の相が何か(固体か液体か), また, プレートの厚さなどに関する情報が述べられており, 問 1 と問 2 ではこれらの情報を正確に読み取る能力をみている。どちらもテキストの内容を正確に読み取る必要のある設問であるので, L1 (情報の把握) を測る設問と言える。

問 3 の問いかけ文では, 新たな「素材」として, 地震波に関する現象についてのテキストを提示され, 「この現象が起きる理由を説明するために, 本文に書かれ

ていることがらのほかに必要となる知識を記述した文として最も適当なものを選べ」と続く。問3では、素材に書かれたことがら以外にどのような知識があれば新しく提示された現象が起きる理由を説明できるかを考える能力をみている。各選択枝について、テキストの説明だけでは足りない部分を補うものになり得るかどうかを評価する必要があり、L3（推論と推察）を測る設問と言える。なお、知識だけで正答が得られることを避けるために、内容的には正しいものの問3の正答にはならない選択枝を含める工夫を行っている。

4.4 L1～L3の能力の問い方について

L1（情報の把握）の能力は、例2、例3を通して見たように、与えられたテキストの内容を正確に読み取ることができるかどうかを問うことで測ることができる。読み取るテキストの長さは、1文であっても複数の文であってもよく、テキストの内容の読み取り方は、細かい点まで正確に把握させても、全体の流れを大雑把に把握させてもよい。その設問で把握すべき情報に応じて、様々な問い方が可能である。

例2の問3では、テキストの内容から考えられる複数の可能性を踏まえて解答させることで、L2（内容の理解）の能力を測っている。L2の能力を測るには、テキストの内容をそのまま読み取るだけでなく、その内容を咀嚼して理解や解釈を行う能力の有無をみる。そのためには、テキストの内容を理解しないとできないこと、例えば、テキストの内容を別の言葉で言い換えられるか、テキストで述べられているルールを適用できるか等を問えばよい。4.1節で示した問い方の例は、これらを問う場合の具体的な例と言えよう。

例3の問3は、追加の情報を与え、素材と追加の情報をつなぐ理由を問う設問である。L3（推論と推察）の能力を測るには、テキストの内容を理解・解釈するだけでなく、推測、評価、判断等を行う能力をみる必要がある。例3の問3のような問い方のほか、追加の情報にもとづいて推論・推察を行わせる、テキストの内容の前提となっていることを考えさせる等の設問も考えられるであろう。

5「素材」と問題例との関連

5.1 作題ガイドラインにおける「素材」

作題ガイドライン（Ver. 2）では「言語運用力」試験の問題作成の基本方針を次のように定めている（大学入試センター研究開発部，2019: 133）。

テキストから情報を読み取って理解し、それをもとに考える能力を問う。そのためには、解答するのに必要な情報が問題の中に含まれている状態を作る必要がある。

「素材」は、この問題作成の基本方針にあるように「解答するのに必要な情報が問題の中に含まれている状態を作る」ために用いられるものであり、「言語運用力」試験の問題の要とも言えるものである。

作題ガイドライン（Ver. 1）に基づく問題の試作に協力した大学教員からは、「素材」は「言語運用力」試験の問題の中で重要な役割を果たすにもかかわらず、選定が難しいという指摘があった。そのため、作題ガイドライン（Ver. 2）では素材の選び方や注意点についての説明を充実させた（椎名ほか，2019）。

作題ガイドライン（Ver. 2）の3.1.3節(1)「素材」では、素材の種類や選び方について、次のような考慮すべき事項を挙げている。

①素材の種類

素材の種類を次に示す。これらの例に限らず、学部や学科の特徴を考慮して、大学での学びに繋がるような素材でL1～L3の能力を問うことができるものを用いてよい。

- ・論説
- ・解説
- ・対話
- ・談話

②素材を選ぶ際に考慮すべき事項

素材の中のテキストを読んだ受検者に対してL1～L3の能力を問うという観点から素材を選ぶ。素材を選ぶ際の観点の例を次に示す。

- ・「問いかけ文」に対する解答を導くことができるテキストであるか（L1～L3）。
- ・事実の説明が客観的に述べられているか（L1）。
- ・テキスト全体の論理構成が明確であるか（L2, L3）。

素材の読みやすさ、分量、内容を検討する際の観点の例を次に示す。

- ・受検者が途中で諦めずに読み通せるレベルの読みやすさであるか。
- ・受検者が解答時間内に読み終わる分量であ

るか。

- ・入学後の学びを受検者に意識させる内容が含まれるか。

5.2 例 2 の素材について

例 2 の素材の種類は「対話（地図を含む）」である。対話の中には正答を得るのに必要な情報だけでなく、「この町は初めてなので、迷わずに行けるか心配だよ」のように不必要な情報も含まれているが、このような冗長な対話の中から必要な情報を抽出して把握する能力をみるための素材として用いられている。また、対話に含まれる情報を読み取り、各施設の位置や経路を把握できるかどうかをみるために、地図が利用されている。

L1（情報の把握）の能力を問うために、対話中の 1 文あるいは対話の全体を読めば特定の施設の場所が把握できるように（問 1, 問 2）、また、L2（内容の理解）の能力を問うために、施設の場所が複数通り考えられるように（問 3）対話が構成されている。

素材の内容は、施設への行き方を尋ねる二人の人物の会話という日常の場面での対話であり、読みやすい。また、大学での学びは、書籍や大学の講義だけでなく、学生同士の会話からも情報を得る必要があり、このような素材は大学での学びの場面を意識したものと言える。

5.3 例 3 の素材について

例 3 の素材の種類は「解説」である。素材は、地球の内部構造について客観的に説明をしている文章である。高校で「地学基礎」や「地学」を履修していなくても内容を把握できるように書かれており、特定の科目の知識を持っていなくても、新しい情報を把握できるかどうかを見ている。

また、問 3 では、L3（推論と推察）の能力を問うために、新たに素材（テキスト）を提示するという工夫がなされている。

例 3 の素材には、日常では触れることが少ないと思われるリソスフェア、アセノスフェア等の地球の内部構造に関する専門用語が含まれている。どのような分野であっても、大学で新しいことを学ぶ際には、見たことのない専門用語を含むような教科書や資料を読むことが必要となる。例 3 の素材はこのように大学で学ぶ際の読みを想定したものである。

5.4 素材と測ろうとする能力について

作題ガイドライン (Ver. 2) では「②素材を選ぶ際に考慮すべき事項」として、「L1～L3 の能力を問うという観点から素材を選ぶ」としている。

L1 の能力を測る設問は、例 2, 例 3 にあるが、両方ともテキストの該当箇所を正確に読めば、特別な知識を用いたり推測を働かせたりすることなく設問の解答が得られるような素材となっている。また、L2 の能力を測る設問（例 2 の問 3）では、問われている施設の場所が複数通り考えられるような素材になっており、L3 の能力を測る設問（例 3 の問 3）では、新しいテキストが追加され、全問に共通するテキストと合わせて推論をさせる素材になっている。L2 や L3 の能力を問おうとする場合には、例 2 や例 3 のように素材のテキストに工夫を施すことによって、設問が作りやすくなる場合があるであろう。

6 考察とまとめ

4 節及び 5 節では、能力の問い方と素材を別々にみてきたが、能力の問い方と素材とは密接に関連している。ある能力を問おうとする場合には、素材であるテキストがその問いに対応できるものでなければならぬ。能力のラベルごとに素材との関連を整理すると次のようになる。

L1（情報の把握）を問う場合には、テキストの内容を正確に読み取ることができるかを問えば良い。したがって、L1 の能力を問う場合の素材は、テキストの該当箇所を読めば、特別な知識や推論を用いずとも設問の解答が得られるようなものである必要がある。そのためには説明が客観的に述べられているべきだろう (cf. 作題ガイドライン (Ver. 2)「素材」②「事実の説明が客観的に述べられているか(L1)」。)。L2(内容の理解)を問う場合には、素材の内容を理解しないと解答できないことを問えば良い。そのため、L2 の能力を問う場合の素材は、素材の内容が理解できるようなもの、すなわち例 2 であれば複数通りの施設の場所が考えられるものであったり、あるいは、テキストで述べられたルールを適用させる場合であれば、ルールを適用して破綻が生じないように整合性がとれているものである必要がある。L3（推論と推察）を問う場合には、テキストに基づいて何かしらの推論を行う必要のあることを問えば良い。そのため、L3 の能力を問う場合のテキストは、推論を行うことができるようにテキスト自体の論理が明確である必要がある (cf. 作題ガイドライン (Ver. 2)「素材」②「テキスト全体の論理構成が明確であるか (L2, L3)」。)。

このように、意図した能力を測るためには、その能力を問うことができるような素材を用意する必要がある。

作題ガイドライン (Ver. 2) は、「言語運用力」の問題を作成する際の一般的な枠組みをまとめたものである。作題ガイドライン (Ver. 2) の 3 節では、「入学後の学修に必要な能力として特に重視する点や入学後に学ぶ分野など、各大学が測りたいものに応じて、問題の難度や内容を調整すること」を作題者に求めている。今後は、各大学が入学者に求める能力に応じて様々な問題を作成していく際の参考となるよう、各大学での実際の出題例等を集めて知見を積み重ねていく必要があるだろう。

作題ガイドライン (Ver. 2) の「能力の問い方」及び「素材」に焦点を当て、問題例を具体的に示しながら、どのように L1 ~ L3 の能力を測る問いを作ればよいのか、また、どのように素材を選べばよいのかについて考察を行った。本稿によって「言語運用力」試験の問題を作成しようとする際の考え方が明確になり、作題ガイドラインの利用が広まれば幸いである。

謝辞

本稿を作成するにあたり、2 名の査読者から有益なコメントをいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。なお、本研究は、大学入試センター平成 28-30 年度理事長裁量経費研究「大学での学修に必要な基本的学力の評価方法に関する研究」として実施されました。

参考文献

- 荒井清佳・桜井裕仁・伊藤圭・椎名久美子・宮埜寿夫 (2018). 『言語運用力』および『数理分析力』を測定するための試験の作題ガイドラインの開発』『大学入試研究ジャーナル』, 28, 7-12.
- 大学入試センター研究開発部 (編) (2014). 『平成 23-27 年度特別研究新しい試験の開発に関する調査研究「大学での学修に必要な基本的能力の測定」』大学入試センター研究開発部.
- 大学入試センター研究開発部 (編) (2016). 『平成 23-27 年度特別研究新しい試験の開発に関する調査研究「大学での学修に必要な基本的能力の測定」最終報告書』大学入試センター研究開発部.
- 大学入試センター研究開発部 (編) (2019). 『平成 28-30 年度理事長裁量経費研究「大学での学修に必要な基本的学力の評価方法に関する研究」報告書』大学入試センター研究開発部.
- 椎名久美子・桜井裕仁・荒井清佳・伊藤圭・宮埜寿夫 (2019).

『言語運用力』および『数理分析力』試験の作題ガイドラインの改訂』『令和元年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第 14 回) 研究発表予稿集 I』, 87-92.